

モラロジーとは何か

目次

望月幸義

- 一、モラロジーと創設者広池千九郎
- 二、学としてのモラロジーの特色
- 三、モラロジーの課題
- 四、最近五十年間の道徳の科学的研究について
- 五、モラロジー研究所研究部の現状と課題

一、モラロジーと創設者広池千九郎

(1) 序

現代の道徳的混乱の原因としては、科学技術の進歩に比べて精神面での向上が立ち遅れていること、物質主義、利己主義、感情主義の蔓延などを上げることができるだろう。しかし、その根本的原因の一つは情報化社会そのものにあるといえる。つまり出版物の増加、交通機関の発達、新聞、ラジオ、テレビなどのマス・メディアの発達、コンピュータやワープロなどの普及によって情報量が飛躍的に増大した結果、人類は多大の恩恵を受けたが、

他方においては、価値観が多様化し、相対化したため、伝統的な価値基準が揺らいできたのである。

トフラーの『未来の衝撃』によれば、人類社会の変化は、文字による歴史が出現する以前には極めて微々たるものであったが、歴史をもつようになると変化がはつきりするようになり、十五世紀のグーテンベルグの印刷機の発明や産業革命によって変化は一層大きくなった。さらに二十世紀以降は加速度的に変化してきているという。このような社会の急速な変化によって人間の意識も変化しており、価値基準が相対化され、価値の混乱を招いているのである。

広池千九郎が一九二八年に樹立したモラロジー（道德科学）は、このような大きな問題をはらんだ時代に、道德の科学的研究の必要を訴えるとともに、人類に普遍的な道德原理として最高道德を提示したものである。

人間の社会生活の基盤となっているのは道德である。そのことに気づいている人々は、道德の再建を訴えたり、宗派やイデオロギーにとられない普遍的道德基準の確立を求めている。

学としてのモラロジーはさまざまな特色をもっている。その一つは最高道德という概念であり、もう一つは幅広い総合的な学問体系である。以下、このことについて述べよう。

(2) モラロジーとは何か

モラロジーとは法学博士広池千九郎が一九二八年に三千頁余りにわたる大著『新科学としてのモラロジーを確立するための最初の試みとしての道德科学の論文』において、道德に関する一つの新科学として提示した学問の名称である。モラロジー (morality) という学術語は、ラテン語の道德を意味するモス (mos) とギリシア語の学問を意味するロギア (logia) を組み合わせて、広池千九郎が造った語である。

広池千九郎以前にも、道德科学 (moral science) という言葉を使用して、それについて論述した学者は何人かいる。広池が『道德科学の論文』の中で紹介している学者は次のとおりである。

レスリー・ステイヴン 『倫理学』、G・ゴア 『道德の新科学的体系』、A・コントの社会学、F・ヨードル 『倫理学及び道德教育』、H・シジウィック 『倫理学の方法』、H・スペンサー 『倫理学原理』、S・アレキサンダー 『道德的秩序及び進歩』、G・ブロー 『実証的道德の研究』

しかし、広池の道德科学の内容は、これらの道德の科学的研究とはその対象領域と内容の点で大きく異なっているため、新しい学術語としてモラロジーという語を作ったのである。

モラロジーは、その定義によれば、「因襲的道德（普通道德）及び最高道德の原理・実質及び内容を比較研究し、あわせてその実行の効果を科学的に証明しようとする新科学」である。ここで、普通道德とは、礼儀作法、慣習及び同情、親切などの徳目など社会一般で道德と考えられているものを指し、最高道德とは、イエス、ソクラテス、釈迦、孔子が実行した道德の系統と日本の皇室に伝わる道德系統に一貫する道德原理を意味する。

(3) 広池千九郎の学問的経歴

広池千九郎は一八六六年三月、九州東部の大分県中津に生まれた。広池はそこで小学校しか卒業していないが、以後、独学で勉学に励み、数々の注目すべき学問的業績を残した。小学校の教師をしていた青年時代には、道德の教科書『小学修身用書』（全三巻）を著すとともに、日本における郷土史の先駆をなした著作『中津歴史』を発行し、その中で、人類の歴史には一定不動の法則が存在し、歴史学の目的はその法則の探究にあるという考えを表明した。

明治二十五年(一八九二年、二十六歳)、歴史家になることを志し、京都に出た広池は、月刊誌『史学普及雑誌』(第一号から第二十七号まで)を発行するとともに、『平安通志』の編集にもたずさわった。又、『皇室野史』を著わした。

その後、広池は研究分野を歴史学から東洋法制史に進め、明治二十八年(一八九五年)に東京に出た。広池は、日本の故事に関する最大の事典である『古事類苑』(全五十一巻)の編纂に十二年間たずさわるかたわら、『中国文典』、『日本文法てにをはの研究』、『東洋法制史序論』、『伊勢神宮』などの著作を次々に発刊した。又、明治三十五年(一九〇二年)からは早稲田大学講師として、中国文法、東洋法制史を講じ、『和漢比較律疏』、『大唐六典』などの研究を行った。

明治四十年(一九〇七年)、広池は伊勢の神宮皇学館大学の教授となり、大正元年(一九一二年)には中国古代理親族法の研究という論文で、東京帝国大学より法学博士の学位を得た。しかし、若年の頃から病気がちであったところに、積年のすさまじい研究生活の無理がたり、この年大病にかかった。広池はこの時、病気に苦しむつも「われ幸いにして病を得たり」という心境に達し、みずから開拓した東洋法制史などの専門学を放棄し、世俗的名譽を一切顧みず、ただ自分の力を全人類の安心、平和、幸福のためにささげることを決意した。

奇跡的に病いから回復した広池は、大正二年(一九一三年)、天理教の本部に入り、教育顧問、天理中学校長として献身的に働いたが、大正四年(一九一五年)には、中傷を受け、本部から退くことになった。その時の大困難に際しても、一切の責めを負って、自己に反省し、歡喜し、感謝しながら一身を処置したのである。それ以降、広池は、人類の安心、平和、幸福実現のためには、特定の宗教や宗派にとらわれない道徳原理を科学的に実証する必要があるという確信から、モラロジーを確立するための研究に没頭し、昭和三年(一九二八年)、『道徳科学

の論文』を完成した。続いて、『孝道の科学的研究』、『新科学モラロジー及び最高道徳の特質』などを著わした。

広池は、昭和十年(一九二五年)、モラロジーの研究を進めるため、又、その研究成果にもとづく学校教育と社会教育を行うための機関として道徳科学専攻塾(現在のモラロジー研究所ならびに麗沢大学、麗沢高校の前身)を開設し、モラロジーの研究と教育活動に専心した。広池は昭和十三年(一九三八年)、群馬県大穴でその七十二年の生涯を閉じた。

広池の新科学モラロジー研究の動機、目的は次の点にあった。

①広池の専門の東洋法制史研究の結果、古代中国の法の目的が個人の権利よりは義務の奨励にあることを知り、義務先行説が成り立つことを発見し、道徳実行の効果を科学的に研究する必要を痛感したこと。

②日本皇室だけが万世一系である原因は、日本皇室の祖先神である天照大神の優れた道徳的精神とその精神を継承した歴代天皇の道徳的努力の累積にもとづくものであることを発見し、道徳の科学的研究の必要を痛感したこと。

③当時、資本主義の発展にともなう労働階級対立が激化し、過激な社会主義運動が急速に勃興する状況において、社会的統合の根本的方法は道徳にあることを発見したこと。

④各宗教の実施している道徳教育は科学的説明が乏しいため感化力が足りない、道徳実行の効果を科学的に証明できれば、宗教家の努力は一層その効果を現わし、人類の幸福増進に役立つと考えたこと。

⑤当時の道徳教育は単なる教訓にすぎなかったため、成人に道徳実行を促すには力が弱かった。そこで道徳実行の効果を明らかにして有効な道徳教育を確立しようとしたこと。

⑥コントの社会学は道徳の科学的研究であったが、それは道徳実行の効果を間接的に証明するだけであつたか

ら、道徳実行の効果を直接的に証明する学問が必要であると考えたこと。

ここに示されているように、広池はモラロジーの樹立によって人間の生き方、社会改善の方法の根本を学問的に明らかにし、世界平和を実現することを悲願としていたのである。

二、学としてのモラロジーの特色

モラロジーが対象としている学問領域は極めて多方面にわたり、また道徳概念も非常に広い意味をもっている。そこでまずこれらの概念の意味を明らかにし、次にモラロジーの四つの課題について述べよう。

(1) 研究対象の広さ

モラロジーは道徳を科学的に研究する学問である。モラロジーが対象としている道徳の概念は、一般の概念と比べて極めて広い。

一般に用いられている道徳の概念は大きく二つの意味に分けて考えることができる。一つは、社会生活ならびに人間関係を円滑にするための規則、ルールという意味であり、他の一つは、良心、正義、同情、親切など個人の内面に関わる心情とそれに基づく行為を意味する。前者は社会現象としての道徳であり、後者は個人の心情と行為としての道徳である。

これに対して、モラロジーにおける道徳は「人間の生存、発達、安心、平和、幸福を実現する精神作用と行為」を意味しており、上記の一般的意味を含みながら、さらに広く人間生活一般にかかわる内容を含んでいる。すなわち、モラロジーという道徳は、人間の社会生活ならびに個人生活のあらゆる側面に関係しているのである。

次に、モラロジーの中心概念は最高道徳であるが、それは万物を生成化育する宇宙自然の法則を意味している。この宇宙自然の法則も上記の道徳概念と同様に極めて広い概念である。モラロジーでは、人間が宇宙自然の法則にのっとって行動する場合、進化し、この法則に反して行動する場合、退化するとしている。この場合の宇宙自然の法則とは、いわゆる自然科学によって明らかにされる自然の法則ばかりでなく、人文科学や社会科学で明らかにされる社会の法則や人間の精神生活の法則のすべてを含んでいる。モラロジーの研究対象はこのような宇宙自然の法則なのである。

この宇宙自然の法則の本質は万物を生成化育する神の慈悲にある。そしてこの宇宙自然の法則と最高道徳は同意義のものとされている。すなわち広池は最高道徳の範囲として、次の法則を上げている。

第一、モラロジーの最初の著書たる本書にいわゆる世界諸聖人の実行上に一貫する道徳の最高原理

第二、自然の法則

第三、社会の法則すなわち社会の慣習及び道徳の法則

第四、精神作用の法則

第五、肉体と精神との関係における法則

第六、遺伝その他人類進化の法則

第七、農工商業及び経済の法則

このように、モラロジーが対象としている道徳、最高道徳、自然の法則は人間生活全般にわたっている。そこで広池はモラロジーを樹立する上で、人文科学から自然科学に至るまでの以下のような諸科学の成果を取り入れている。

地質学、地文学、生物学、進化論、発生学、環境改良学、優生学、民族学、生理学、人類学、考古学、法理学、心理学、社会学、犯罪学、文明史、法制史、経済史、道德史など。

これらは、現代の用語では、経済学、政治学、教育学、その他の社会科学を含んでいるといつてよい。上記の諸科学は、実証科学的性格が強いものを挙げている。現在では多くの社会科学は実証科学的性が強いといえる。

このような広い対象をもつモラロジーの学としての課題を一言でいえば、次の四つになる。

- ① 道德の科学的研究である。
- ② 個人の品性完成の科学である。又、個人の幸福実現の科学である。
- ③ 社会の改善ならびに世界平和実現をめざす学問である。
- ④ 全人類の進化を目的とする学問である。

上記の課題からも分かるように、モラロジーは、個人と社会の幸福、進歩、発展の道を科学的に探求することを目的とする学問であり、同時に人類の進化、発展の道を探求する学問である。その際、自然と人間、個人と社会の相互依存性を基盤にし、人類全体の進歩、向上を目差した学問である。このことを実現するために、最も有効なものが、イエス、ソクラテス、釈迦、孔子、日本の歴代天皇などの聖人、偉人などの思想と道德に一貫する道德原理としての最高道德であることを実証した学問である。

科学の進歩とともに、学問は細分化され、今日このような壮大かつ道德的な意図をもった学問は極めて少ない。つまり、現代の諸科学は、個々の対象を研究することが多く、人類全体の問題を扱うことは少ない。又、人類の進化、世界の平和、世界モデルなどの大きな対象を扱う学者も存在するが、これらの学者は、個人の幸福や道德性の向上を扱うことが少ない。

歴史的にみると、これまで人類全体の安心、平和、幸福の実現を目差した学者としては、プラトン、アリストテレス、トーマス・アクイナス、ロック、カント、ヘーゲル、スペンサー、コント、マルクスなどを上げることができらう。これらの学者の中で、モラロジーに一番近い学者はスペンサーとコントであるが、その理由はその科学性と道德性にある。ただしスペンサーやコントにしても、その研究内容には最高道德的要素は少ない。

最近の学者で、総合的な体系の確立を目差した学者としては、ヤスパース、W・シュルツ、ソローキンなどを上げることができらう。特にヤスパースとソローキンの研究には、聖人研究が含まれている点で注目される。さらに、最近約二十年間の宇宙的システム論や宇宙的意識の研究を中心とする潮流には期待すべきものがあるらう。いずれにせよ、最近の学問の動向が壮大な体系に向かいつつある点、モラロジーの目差している方向と関連が深くなつてきているといえる。

上記四つの課題は、『道德科学の論文』に明確に区別されて論じられているとはいえないが、次に『道德科学の論文』の目次にしたがって、その内容を簡単に紹介しておこう。

第一卷 因襲的道德及び最高道德の原理及び実行に対する科学的考察

第一章 道德科学とは何ぞや

第二章 モラロジーと人類生活の完成

第三章 人類階級の先天的原因

(広池は人間存在を成り立たせている条件を先天的原因と後天的原因に分け、ここでは先天的原因としての自然環境、社会環境、遺伝と人間存在の関係について考察している。)

第四章 人類階級の後天的原因

(人間存在を成り立たせている後天的原因である個人の精神作用と行為について、心理学、心身医学などの成果を使用しつつ考察し、精神作用と行為の重要性を示している。)

第五章 人類の精神的及び物質的生活の根本原理

(ここでは精神作用の意味、知識と道徳の一体であるべきことについて述べている。)

第六章 先天的及び後天的原因より来るところの人類の身体、生活上に現れたる特徴及びその運命に対する精神的考察

(ここでは、諸学問の成果を利用しつつ、人間と動物の相違、人類における未開と文明の相違について論じている。)

第七章 本能・知識・道徳・社会の構成・文明の性質及び人類幸福の相互関係における考察

(人間社会は本能知識及び道徳心によって構成されていること、人類は自己保存の本能から道徳へ進歩してきたこと、道徳の本質、因襲的道徳以上の道徳の発生について考察している。そして社会の本質・文明の実質及び人類の幸福は道徳に基づいているとしている)

第八章 人類の進化及び退化の法則に関する考察

(進化及び退化の意味を規定し、人類社会にも生存競争の法則、適者生存の法則及び人為淘汰と自然淘汰の法則が働いていること、人類社会は結局道徳によって進化することを示している。)

第九章上 人類の平和及び幸福享受の方法に関する現代人の思想の誤謬

(政策、政治、法律の改良と個人及び社会の幸福の関係、帝国主義、軍国主義、保守主義、社会主義、デモクラシーでは社会の改善、世界の平和は実現できないこと、社会改善のためには最高

道徳が必要なことを述べている。)

第九章下 労働問題・小作争議・国家的公共事業もしくは慈善事業に対する貴族・富豪・資本家ならびに

地主の方針及び方法の誤謬

第十章 因襲的もしくは普通的道徳

(普通道徳の内容について詳細に説明している。)

第十一章 文明進歩の傾向と道徳の質的進歩

(コスモポリタニズム・ヒューマニズム及び世界平和の思想の発達、カントやグロテイウス、国際連盟などの世界平和の思想について紹介している。)

第十二章 最高道徳の実行者

(ここでは聖人の資格について述べ、ソクラテス、イエス、釈迦、孔子の実行及び教訓について考察している。)

第十三章上 日本皇室の御祖先天照大神の御聖徳及び日本皇室の万世一系の真原因

第十三章下 日本皇室の万世一系とその他のあらゆる万世一系との原因の考証

第十四章 最高道徳の原理・実質及び内容

(最高道徳の五大原理の内容について詳細に説明している。)

第十五章 最高道徳実行の効果に関する考察

(最高道徳の実行とその結果との間の因果関係について実証的に考察している。)

(最高道德実行の目安とするため一一八の格言を示し、実行の具体的指針を示している)

以上、要するに、モラロジーは最近の科学的研究の結論の基礎に立って、人間存在の成立条件、社会の進歩、発展の条件ならびに古聖人が実行した最高道德の実行とその効果を、歴史的及び科学的に明らかにしたものである。

(2) 最高道德

モラロジーの最大の特徴は、学としての道德科学を提示している点にあるが、もう一つの大きな特色は、最高道德という概念を提示している点である。すなわちモラロジーが新科学として提示された根本理由は、最高道德の原理の発見にある。広池は、「新科学」であるためには、あらゆる既成科学の中になく新原理の発見あるいは既成科学の諸原理を根本的に改訂するだけの価値のある根本原理を発見していなければならないとしている。モラロジーが発見した新原理にはさまざまなものがあるが、その中核となっているのが最高道德の諸原理である。そこで、上記の四つの学としての課題について述べる前に、最高道德の意味について説明しておく。モラロジーの学としての四つの課題はすべて、最高道德的視点が加味されており、それによってそれらの課題の特性は一層著しいものになっているからである。

道德を最高道德と普通道德に分けて考察していることは、広池千九郎のモラロジーにおける視点であるといえる。学問の研究において、何らかの視点や前提をもつことは不可欠なものである。「最高道德」は、いわばマックス・ウェーバーの理念型に相当するものである。すなわち、現象としての純粹な最高道德そのものの存在を特定することは困難であるとしても、理念的な形態としての最高道德は考えることができるのである。このような方

法はほとんどすべての科学が用いているのである。

諸聖人の思想、道德に一貫する道德の内容を把握する場合、その内容は研究者の視点によって異なるのが普通である。例えば、ヤスパース、ソローキン、和辻哲郎(『孔子』)などの聖人研究などはそれぞれ異なっており、モラロジーという最高道德とは、その根本においては共通する点も多いが、相違している点もある。

広池の諸聖人の思想と道德の研究は若年の頃より始まり、特に儒教、仏教、日本皇室の研究は長年の地道な文献研究に基礎づけられている。次の一節には、このことが十分に示されている。「さてここにちよつと一言いたしたいが、それは聖人の書と申しても大変なものであるで、とりわけ仏教の經典を讀破することが大変であります。西洋の学者などが、パリ語やサンスクリットで書いた仏教の本を讀んで仏教を談ずれど、それは仏教の經典の一部分しか、そういう言葉では書いてないのであって、仏教の經典全部はみな漢訳で中国語で書いてあるのです。それ故中国の古典の読める人でなければ仏教というものは解つていとはいえないのである。それからキリスト教のバイブルは簡単なものであります。けれども仏教の次に難かしいものは儒教である。十三經というものが十三經が正統の孔子の教ではない。けれどもそれに精通せねば孔子の教は解らない、その十三經の注釈といえ古今にわたって大変な冊数です。単に近頃の清朝の「皇清經解」「統皇清經解」というものだけでも大変です。以上列挙いたしましたところの内外の図書はみな道德科学図書館にあるがこれを読むだけでも人間一代はかかる仕事であるのです。そこで私はかかる内外における大部の書物を主要の処だけをば精讀しましたが、その他は数十年の間に涉獵して調べたのです。」(『皇室奉仕の事跡』一三三―一四頁)

このような深い聖人研究の結果、その思想と道德に一貫する道德として最高道德を発見したのである。そしてその世界諸聖人の実行に一貫する最高道德の核心は、諸聖人が宇宙自然の法則に従って、人心の救済に献身した

点にある。

又、広池は最高道徳の実質の核心は「慈悲」にあるとしている。つまり釈迦の教えの根本は慈悲、孔子の教えは仁、イエスの教えは愛（アガペー、Love）にあるとしている。これらの聖人の教えを細かい点にわたってみると、三者は相互に異なっている点があるばかりでなく、その一人の教えの中だけでも、非常にまちまちであって一定していない。しかし、孔子の「仁」、釈迦の「慈悲」、イエスの「愛」の究極の意味は、普通道徳的なものではなく、神の心に一致する一視同仁の意味なのである。

最高道徳の具体的内容は、自我没却の原理、慈悲実現の原理、義務先行の原理、伝統尊重の原理、人心開発救済の原理の五つの原理に示されている。その内容を簡単に示しておく。

第一は、自我没却の原理である。自我とは、私欲、高慢、傲慢、怒る心、嫉妬心、不平・不満の心など、他人や社会の利害を顧みないで自分の欲望を満足させようとしたりする利己的な心づかいのことである。悲観することや単に消極的な心づかいや態度をとること、ニヒリズムなども自我の表われである。このような心づかいと行いは、自分の生存、発達を妨げ、自分も他人も苦しみ、不幸をもたらす原因になる。そこで我々は自我を没却し、そのかわりに神の慈悲心に少しでも同化するよう自分の心づかいを改める必要があるのである。

我々人間は不完全きわまりないものである。お互いに不完全であるがゆえに悩みが生じ、争いが起こる。そこで、悩みや争いや事件が生じた場合には、たとえ自分に責任がなく、自分が正しいと思われる場合でも、自分の道徳的努力が足りなかったものとして心から反省することが大切である。

第二は、慈悲実現の原理である。慈悲実現とは、神の存在を認め、確信し、その心である慈悲心を自らの精神の中に培っていくことである。宇宙には自然の法則が存在しており、その法則を支配しているものとして神の存

在が古来から考えられてきた。我々人間は、宇宙の現象の一つとして存在しているのであるから、大自然の法則の支配を離れて生きることができない。我々は、自分の意志や能力だけで生きているのではなく、大自然の法則の作用によって生かされているのである。この大自然の作用、すなわち、すべてのものを育てあげていく働きが宇宙自然の法則つまり神の心である。神の心の本質は、万物を生成化育する慈悲である。

慈悲とは、普遍的に人間を愛する心であり、すべての人に対する低い、優しい、温かい心、すべての人を育てあげる親心である。我々は一視同仁の温かい、柔らかない、広い慈悲の心になり、世界の人々が一日も早く幸福になつてもらいたいと祈念することが大切である。すべての人間ならびに生物が一層多くの喜びをもつ世界の実現が神の意志である。神の慈悲は、すべてのものがより充実して、喜びに満ちて生きることができるようになることである。我々がこの神の慈悲を体得し、その実現のために努力を積み重ねる時、品性が向上していく。

第三は、義務先行の原理である。すべての人間が、生まれながらにして人間として尊重され、その基本的人権が保障されることは、今日の民主主義社会の大原則である。我々はこの基本的人権を不断の努力によって保持し、現実のものとしていかなければならない。ところで、権利をもっているということは、他人の権利を尊重する義務を負っているということである。いいかえれば、権利が正当に行使されるためには、まずお互いが義務を果たす必要がある。このように権利と義務は必ず表裏の関係にある。

モラロジーでは、人間の権利と義務について道徳の立場から考察している。我々が今日生活しているということは、親・祖先をはじめ、無数の恩人や先輩たちの苦勞と努力のおかげである。それらの恩恵に感謝し、先人・先輩の志を継承していくことは我々の義務である。このように我々の人生はまわりの人々によって支えられているのであるから、その意味でも我々は生かされているといえるだろう。そこで、単に他人に支えられて生きるば

かりでなく、自分自身が他人を支えることができる人になることが必要である。それがもろもろの恩恵に報いていくことになる。

そればかりでなく、我々はこれまで大自然の法則、とくに心づかいの法則に違反することが多く、その意味で神に対する罪を犯してきたのであるから、これらの罪をつぐなっていく必要がある。モラロジーでは、このような義務を遂行で果たすことが、我々の品性を向上させ、人間の尊厳を確立して幸福をもたらす基礎になることを明らかにしている。この義務の実行が、すべての人の基本的人権をいっそう確実なものにし、世界平和を実現する道である。

第四は、伝統尊重の原理である。ここでいう伝統とは、人類の生存、発達、安心、平和、幸福の実現に貢献した人類の恩人の系列を指している。モラロジーでは、この恩人の系列を大きく国家生活の恩人、家庭生活の恩人、精神生活の恩人、社会生活の恩人の四つに分けている。我々はこのような恩人のおかげによって今日の生存を全うしているのであるから、伝統を尊重し、これら大小もろもろの恩人に心から感謝し、報恩していくことが独立自由の人格を完成していく上で不可欠である。つまり、我々自身が万物化育の働きを行う伝統の精神を継承し、実現していくことが人間としての道であり、この伝統に対する尊敬と報恩の行為は、自分ひとりが受けた私的な恩恵に報いることとは違って、万物を生成化育する神の働きを助けることになる。

我々の生命は長い人類の生命の流れの一点である。このことを自覚することは、自分が生かされていると同時に、この悠久の宇宙の生命の流れを生きるものであるから、限りなく大きな意義がある。このような生命の歴史性は、過去から現在への生命の流ればかりでなく、未来に続く生命の流れをも含んでいる。しかも、これは単に生物学的な生命の流れとして考えるだけでは不十分であり、人類の文化の歴史としても考えなければならぬ。

生命は単に個人の問題ではなく、自然の中に生きる個人、社会の人々に支えられて生きる個人の生命でもある。このように社会の中で、歴史を背負い、未来に生きる人間、いわば宇宙の中で生きる人間としての尊厳にこそ、人間存在の真実があるだろう。

第五は、人心開発救済の原理である。これは、我々が利己心を離れて慈悲心になり、その救済された心を他の人々に伝えていくことである。人心の開発救済は、人間の活動として根本的に重要なものであって、これを不断に実行すれば、我々の慈悲心を培うことになり、品性が高まって、幸せな人生と平和な社会を築くことができる。これは他にどのような善いことを行うよりも、人間にとって最大の善事になる。

以上の最高道徳の諸原理は、慈悲の精神を基盤にして互いに深く関係しており、渾然と一体をなして、我々の心づかいと行いの標準、つまり品性完成の方法を示している。

(3) 普通道徳と最高道徳

次に普通道徳と最高道徳の相違について述べよう。広池千九郎は青年時代より、敬神家であり、普通道徳の立派な実行者であり、又、正義感が人一倍強かった。しかし、人間的正義だけでは人類を幸福に導くことは不可能であることに気づき、人間的正義を越える道徳原理の存在を発見したのである。広池は人間的正義の不完全であることについて、次のように述べている。

「すべて社会の紛擾も、個人の肉体の疾病も、皆かかる人間社会の正義を標準とする道徳観念の衝突から起こるのである。すなわちかくのごとき衝突はその当事者はもちろん、それを見聞するものの精神に至るまで不安にして、その累積の結果は肉体の違和すなわち疾病となり、かつ運命の閉塞となり、その集合の結果が社会も

しくは国家の不和紊乱となるのであります。』（『広池千九郎先生の歩み』一三八頁）

つまり人間的正義だけでは、人間は幸福になることができず、社会全体を向上させることができないのであり、慈悲の心に基づく最高道徳が必要なのである。この最高道徳は真に一人一人の人間性を尊重するものであり、正義という視点だけで判断するのではなく、どのようにすれば、自他が救われるか、幸福になるかによって判断するのである。これは正義という目標の実現を目ざしながらも、その実現方法としては、慈悲の心に徹しようとするものである。そこで問題が生じた際には、正義を主張することに固執することなく、相手に一步譲り、自己に反省することによって、自他の精神を改善する道を探求するのである。広池は自分が相手に譲り、相手のために犠牲を払っても、一時的には自己に不利益になるようなことがあっても、長期的にみれば、決して自己の損害にはならないことを発見したのである。

普通道徳と最高道徳の大きな相違点を表示してみよう。

普通道徳

社会一般に道徳と考えられている道徳
実行の際の形が、結果として重視されるようになって
いる。

道徳実行の動機が利己心に基づいていることが多い。
人間的正義を根本とする。

義務感や強制されて、他人のために道徳を実行する
という気持ちが強い。

自分が他人に対して道徳を実行すれば、他人からも同
様の行為ないし報酬を要求する気持ちをもっている。

give and takeの関係が中心。

成功や幸福が得られても、一時的なものであることが
多い。

自分、他人、第三者のすべての幸福をもたらすもので
ない。

最高道徳

聖人の思想と道徳に一貫する道徳
形は普通道徳と同じになる場合が多いが、心づかいを
重視。

利己心を克服して、慈悲心に基づく。

正義の基礎に立った慈悲を根本とする。

自主的に、喜んで、しかも究極的には自分自身のた
めにもなるということを理解した上で道徳を実行する。

自分が他人に対して道徳を実行しても、相手からその
報酬を要求する気持ちをもたない。

自分から子孫へと続く末広がりな永続的な幸福が得ら
れる。

自分、他人、第三者すべての幸福をもたらす。

以上、普通道德と最高道德を対比して述べたが、モラロジは普通道德を全面的に否定するものではなく、普通道德の有効性を認めるばかりでなく、最高道德の実行においても、普通道德の実行は前提条件として不可欠なものとしてされている。我々は普通道德を実行した上で、最高道德の精神で普通道德を純化し、さらに最高道德の実行に進むべきなのである。

(4) モラロジと倫理学ならびに宗教

学問としてのモラロジが倫理学と異なるのはいうまでもない。道德科学は道德実行の効果を科学的に証明しようとする精神科学であるのに対して、倫理学は主として道德の原理を合理的に説明する学問である。従来の倫理学者の研究中には、道德実行の効果を科学的に証明しようとする企てがなかったわけではないが、これまでのところ十分成功しているとはいえない。倫理学が人類の道德を發達させる上で大きな貢献をしてきたことは事実であるが、倫理学がどんなに進歩して、道德の原理が明らかになっても、道德実行の効果が証明されないかぎり、聖人あるいは偉人を除いて、普通の人が楽しんで道德を行うようにはならない。

もちろん、道德は本来、自己が神に対し社会に対して行うべきものであって、その効果の有無は問うべきものではない。しかし道德を実行しても幸福になるかならないか分からないとすれば、道德を積極的に実行するモチベーションが湧いてこないのも当然である。したがって、道德を実行すれば必ず善い結果があるということが科学的に証明されているからこそ、はじめて熱心に道德を実行することになり、そのことが幸福の実現にもつながるのである。ここにモラロジと倫理学の相違がある。

次に、モラロジ及び最高道德と宗教との関係について述べておこう。最高道德は諸聖人の思想と道德に一貫

する道德原理であるから、宗教と深い関係があることは当然であるといえよう。広池は宗教が説く真理と科学上の真理は本来一致するものとしている。しかし、両者は、次の点で相違している。

(ア)モラロジは科学的研究を基盤にしている。

宗教は信仰を本質としている。宗教は神を信仰するのに対して、モラロジは聖人の教説の実生活上の有効性を科学的に証明している。

(イ)モラロジは普遍性をもっている。

宗教が自己の宗派性に囚われ、互に対立することがあるのに対して、モラロジは、一宗一派の教理や偏狭な主義に囚われることなく、普遍的な道德原理を提示している。

(ウ)最高道德は質の高い道德である。

偉大な宗教は質の高い道德原理を提示しているが、そこには普通道德的要素も多く混在しているため、信者に最高道德的内容を明確に示していない嫌いがある。モラロジでは、質の高い道德内容を示し、その具体的実行の方法を示している。

(エ)モラロジの活動は信仰を広める布教活動ではなく、教育活動である。

モラロジは学問であるから、その成果である最高道德を社会に広めるにあたっては、相手に信仰的に実行させるのではなく、教育によって理性に訴えることを基本としている。

三、モラロジの課題

(1) 道德の科学的研究

① 道德の科学的研究を否定する見解について

学としてのモラロジーの課題として第一に上げるべきものは、道德の科学的研究を行っていることである。道德の科学的研究つまり道德科学の可能性については、これまでのところそれを否定する立場の学者のほうが圧倒的に多いといえる。否定する理由も大小さまざまなものがある。以下に、その代表的な理由を上げてみよう。

(ア) 道德は「――すべし」と命じる当為 (Sollen) ないし規範であり、科学は事実 (Sein) を対象とするものであるから、道德は科学の対象とはならないとするものである。

(イ) 事実 (Sein) の研究から当為 (Sollen) や規範を導くことは自然主義的誤謬である。

(ウ) 道德的価値の科学的研究はできない。

(エ) 道德の実行は必ずしも常によい結果をもたらすとはかぎらないから、道德的因果律は成り立たない。

(オ) 道德は意志の自由を前提にしているものであり、因果関係を追究する科学とは矛盾する。

これらの否定論に対して、それぞれ反論することは重要な課題であるが、ここでは深く立ち入らない。ただし、上記(ウ)の道德的価値を科学的に研究できないという見解は誤りである。すべての科学は何らかの価値の研究である。そして、多くの研究は道德的価値を含んだ価値の科学的研究を行っているのである。又、最近の科学論などでは、上記の否定論を否定する見解が徐々に増加してきていることは確かである。例えば、現象学、デイルタイなどの解釈学、道德科学に関する著者、マスロー、オルポルトなどの人間性心理学者、物理学者などがある。道德の科学が可能であることを主張している学者は増加の傾向にある。

② 科学方法論

道德の科学的研究という場合、科学の意味が問題となる。一般に科学的方法ということ、自然科学的方法と社会

科学的方法がある。その際、自然科学的方法と社会科学的方法は同様のものと理解されることが多い。自然科学的方法は、帰納と演繹によって法則を導くものである。帰納とは、個別的な事柄の集合から一般的な法則を導き出すことである。この方法は、観察、実験を中心とする。

広池が科学ないし科学的方法という場合、中心的には、このような自然科学的方法を意味していた。つまり、広池によれば、科学とは自然科学の研究法によってその原理を確定した場合にできあがったところの原理の体系を指す。それは、その研究資料を集めて異同を鑑別し、同じものを集めてそこに一貫する原理を求めらるものである。「自然科学に一致する精神科学ならは真理にあらず」と述べている。

しかし、自然科学の方法では、知情意をもった人間や一回的な歴史的事実を研究するには不十分であるという点から、社会科学独自の方法を用いるべきであるということが、生の哲学の流れをくむデイルタイや、ヴィンデルバント、リッケルトなどの新カント学派によって強く主張された。例えばデイルタイは、自然科学と精神科学の相違を、前者が自然を対象とするのに対して、後者は精神を対象とする点に求めた。また自然科学は観察や実験をし、その結果を記述するという説明的方法を用いるのに対して、精神科学は生の事実を体験し、理解し、表現するという理解的方法を用いているとしている。

さらに、ハイゼンベルグの量子力学によって、従来の自然科学的方法の妥当性に疑問が提示されて以来、今日では、各方面から新しい科学方法論が模索されているということが出来る。たとえば、フッサールの現象学的方法、デイルタイ、ボルノー、ガダマーなどの解釈学的立場、マスロー、オルポルトなどの人間性心理学の立場、ミカエル・ポラニーの科学も主観性を根拠としているという説などをあげることが出来る。

現象学、解釈学、人間性心理学などの立場の基本となっている考え方は、知情意をもった人間の全体を把握し、

価値や意味を含んだ人間の事実を、理解ないし解釈するという方法によってとらえ、そこに法則性を見い出して
いこうとするものをいえる。

先に述べたように、広池は道徳科学の方法論として基本的には自然科学方法論によっているといえるが、実際
には、上記の精神科学や社会科学方法論などの方法をとっている。そのことは、例えば次のような文章に示され
ている。

「日本の古典にも、仏教にも、儒教にも、キリスト教にも、ソクラテスの教にもあることにて自然科学にも歴史
にも社会学的材料にも合致した学問及び道徳の原理を天地の法則と見たのです。」（『皇室奉仕の事跡』一二頁）

「本書は科学的研究を標榜しておりますが、しかしながら、往々純科学的に明らかならざることをも、常識と、
経験と、歴史的事実と、聖人の教説・教訓及び実行とに照らして、これらに合致せるものは、これを純科学に準
じて信用し得るものと見なしたる箇所もあります。何となれば、現代の諸科学はいまだ不完全なるが故に、いか
なる微細のことまでも、今日これを純科学的に証明し得るものではないからであります。」（『道徳科学の論文』①
第一緒言九九頁）

ここで、広池が純科学的に証明できない場合には、常識と経験と歴史的事実と聖人の教説、教訓、実行に照ら
して判断した方法が、今日では科学方法論としても有効であるとされる傾向が出てきている。

人間と社会のすべての事象を最高道徳的視点から研究しようとするモラロジーは、個人の主観的恣意的な判断
ではなく、広く可能な合理的、実証的方法を用いるべきである。そのような研究を科学と呼ぶか、科学よりは広
い概念としての学問と呼ぶかは、用語の問題にすぎないだろう。

いずれにせよ、広池自身は、現在のところ、純粹に科学的な視点からみれば、かなり不十分な点があるとして
も、より客観的、実証的学問を目差していたことは確実である。

次に科学の本質は予見することにあるといわれる。つまり現在の状況から将来の状況を予想できるということ
である。モラロジーもそれを意図していることは当然である。しかし、このことを確実に行うことはなかなか困
難なことである。その理由としては、人間の精神作用が極めて変化し易いものであること、一つの結果をもたら
しているものは、多くの原因が存在しているが、それらの原因の一ないし二に注目して因果関係を究明するだけ
では、広い意味での道徳の科学的研究を目差しているモラロジーの研究としては不十分な点が残るからである。

しかし、完全な予見能力が科学の条件とはいえない面がある。つまり、台風の方向や地震の予知は必ずしも常
に正確であるとはいえないが、気象学や地震学が科学であることを疑う人はいない。同様に、ある個人の現在の
精神作用と行為から判断して、その人の将来の運命はおおよそ予想できるものといえるだろう。つまり、そをつ
く人間が将来成功するとは多くの人は考えない。多くの人は「正直は最良の政策」であると考えている。現在道
徳的な人間は将来幸福となる確率は高いのである。

③ 広池千九郎以前の道徳の科学的研究

従来の道徳の科学的研究の大きな潮流を挙げれば、イギリス経験論、功利主義、進化論、フランス社会学派、
アメリカの実証主義、プラグマティズムなどがある。これらの研究を行っている代表的な学者として『道徳科学
の論文』に引用されている学者として以下の学者がいる。

(ア)イギリス経験論 ベーコン、ロック、アダム・スミス

(イ)イギリス功利主義 ペンサム、J・S・ミル、シジウィック、J・ラボック

(ウ)進化論 ダーウィン、ヘッケル、ヴント、スペンサー、サザーランド、キッド、L・ステイヴン、ホップ

(二)道徳社会学 コンント、デュルケム、ブルジョワ、レヴィ・ブリュール、ジンメル、ウェスタマーク、G・ブロー

(三)アメリカ実証主義 サムナー、ウォード、ギイディングス、エルウッド

(四)その他 ヴント、ジンメル、プリストル、カーヴァ、ソーレイ、ヨードル、グリーン、コン、クロボトキン、マクドゥーガル、デューイなど

このことから分かるように、『道徳科学の論文』には、進化論や道徳の実証的研究をしている中心的学者はほとんど網羅されているといえよう。それ故、モラロジーがこれまでの道徳の科学的研究と深い関係にあることは確かである。しかし、これらの研究とモラロジーとは、かなりの点で異なっている点がある。これらの学説とモラロジーの相違は、結局は両者の研究の視点の相違にあるといえよう。参考のために、これらの学説のいくつかを取り上げ、モラロジーと比較してみよう。

A 功利主義

ベンサムは功利主義を定義し、「功利性とは利害関係者に対して、恩恵、利益、快樂、善あるいは幸福（これらものは結局同じものになるのだが）を生み出す傾向を意味する」とし、次に「ある行為が関係者の幸福を増大させる場合は、その行為を承認し、減少させる場合は否認する原理を功利性の原理という」と述べている。そして「最大多数の最大幸福」が政治、教育の目標であるとする。ここで最大多数の幸福といった場合、社会全体の幸福を目差していることになるが、ベンサムは社会の利益とは社会を構成している個々の構成員の利益の総和と考えている。

J・S・ミルの功利主義も、快樂の質的相違を認めている点、個人の幸福よりも社会の幸福を優先している点を除けば、ベンサムとはほぼ同じ内容をもっている。

ここで述べられている限りで、功利主義的倫理思想とモラロジーとの相違は、モラロジーは快樂主義の立場に立たないこと、モラロジーは個人の幸福と社会の幸福をともに実現する学説であること、モラロジーは人心救済の動機、目的に基づいていることなどにある。

B フランス社会学派

これは、コント、デュルケム、レヴィ・ブリュールなど、フランスの社会学派を中心とした倫理学であり、この立場は科学的倫理学が道徳法則や規範を生物学、心理学、社会学などの一つないし二つ以上の実証科学の研究成果から導きだそうとするのに対して、道徳的事実そのものを科学的に研究しようとするものであり、「道徳の科学」を確立しようとするものである。レヴィ・ブリュールは、道徳は集団の歴史的社会的な生活条件に規定される社会現象であるというデュルケムの立場に立ち、道徳現象を与えられた事実として客観的に観察し、法則を導き出す社会学を習俗科学 (science des moeurs) と名づけた。モラロジーとこの学派を比較してみると、この学派は一般に、①個人の精神作用の研究が欠如していること、②普通道徳の研究が中心であり、最高道徳的視点が欠如していること、③道徳実行をその効果との因果関係で研究するという視点が欠如していること、及び④研究対象を道徳現象に限る点で、モラロジーに比べてずっと狭い範囲の研究であるなどの点を指摘することができるであろう。

C コントの社会学

モラロジーと一番近い関係にある道徳の科学的研究はおそらくコントの社会学であろう。即ち、広池は、「子の

道徳科学の研究を思い立てる動機及び理由三「社会学の偉大な功績」としてコントの社会学を上げている。しかし、この社会学（コント以後の社会学も含めて）は、道徳的因果律を間接的に証明しようとしている点で不十分であったという。すなわち、第一に、コントの行った社会的事実の实证的研究は、政治、法、経済、道徳、教育などのすべての社会現象を対象としており、個人の道徳的な精神作用と行為という意味での道徳現象を直接の対象としたものではなかったこと。したがって、個人の精神作用と行為とその結果との因果関係を直接に研究したものはなかったこと、第二に、コントの道徳が人間の利己心に基づく普通道徳に止どまっており、最高道徳の研究が十分に含まれていなかったことにある。

ここでモラロジーと従来の道徳の科学的研究の相違点をまとめてみよう。

(ア)従来の研究の対象は、狭い意味での道徳的意識又は道徳的事実であり、モラロジーの対象である、精神的、社会的、自然的現象と比べて極めて狭い。従来の研究は、心理学的研究か社会学的研究のどちらかに偏する場合が多いが、モラロジーは両方面の研究を行なう。つまりモラロジーは人文科学、社会科学から自然科学に及ぶ広範な領域の事実を総合的に研究している。

(イ)従来の研究は、フランスの道徳実証主義の研究を除けば、明確な道徳的視点から現象を研究していない。しかも最高道徳的視点からなされている場合は、極めて稀である。モラロジーは、道徳を普通道徳と最高道徳に分け、最高道徳の観点から聖人の思想、道徳の研究をはじめ、その他の研究を行っている。

(ウ)従来の研究は、道徳実行と幸福との因果関係を間接的に研究しているのに対して、モラロジーは直接的に因果関係を研究している。特に道徳的精神作用の因果律を研究している。

(エ)従来の研究は、理論科学的研究が中心であり、応用科学的研究が少ない。モラロジーは道徳教育、社会改善

の方法などの研究を重視している。

(オ)従来の研究は、規範ないし当為又は実践と理論との関連性を軽視し、両者を峻別する傾向があるが、モラロジーでは、科学的研究と規範及び実践の問題とを明確に分けてはいるものの、両者は密接な関連をもつものと考えている。即ち、道徳実行の効果を証明することによって、規範に根拠を与え、実践への意欲を高めることができると思えている。

(カ)モラロジーは学問の質の改善を要請するとともに、研究に携わる学者の精神作用と人格を重視している。

(キ)モラロジーは神を学問の対象としている。神は宗教の専有ではなく、学問にも不可欠のものとしている。

(2) 品性完成の科学——幸福実現の科学

① 人間存在の成立条件

モラロジーでは人間存在を成り立たせている要因として、自然の環境、社会的、文化的環境、遺伝と家庭環境、人間各自の精神作用と行為の四つの要因があることを明らかにしている。この四つの条件が総合的に影響しあつて、我々人間の存在が成り立っているのである。そして、モラロジーは個人の精神作用と行為を改善することによって、その境遇、運命を変えることができることを示している。

常識的に考えても、我々の運命が遺伝と環境と個人の努力によっていることは理解できるが、モラロジーの特色は自分自身の精神作用と行為を改善することによって運命を改善できることを示している点にある。広池は、この点をモラロジーを樹立した最大の理由の一つとしているのである。もちろん、広池は遺伝や環境についても諸科学の成果を使用しつつ綿密な検討をしている。

我々の存在の成立条件あるいは運命の改善とは、いいかえれば幸福の実現である。古来、幸福の定義はさまざまなものがあるが、モラロジ―では幸福とは永続的な心の喜びと安心であるとするが、モラロジ―の定義の特色はそのことを可能にする基盤として健康、長命、開運、子孫の繁栄を重視している点にある。

② 品性の完成

人間は何歳になっても向上心を失うことはない。その向上心の中核となっているのは、人間性、人格、品性、道徳性などさまざまな言葉で呼ばれている。モラロジ―ではこれを「品性完成」という言葉で呼んでいる。

品性の人間生活における価値は二つに分けて考えることができる。一つは品性は実生活の中心価値であること、もう一つは生涯教育、生涯学習の中心課題であるべきものであることである。ここでは前者について述べ、後者については、累代教育として次項で述べる。

人間の品性完成の探求はこれまで哲学、思想、倫理学、宗教、その他の精神修養などさまざまな形で行われてきた。しかし、科学的研究に基づいた品性向上論は少ないだろう。

これまで、道徳性の発達について研究した学者としては、ピアジェ、コールバーグ、レスト、ライト、ハヴィガースト、C・ビューラー、エリクソンなどを上げることができるだろう。しかし、上記学者のうち、一部の学者を除けば、その研究の中心は、成人期以前の人間の道徳性の発達にある。これに対して、モラロジ―は人間の生涯にわたる品性の向上の研究を中心的課題としている。ここに一つの特色がある。

モラロジ―という品性とは、道徳的な精神作用と行為を累積することによって形成される卓越した道徳的能力のことである。これは人格の中心にあつて、心身の諸機能やその働きを統合する力であつて、この卓越した能力は徳とも呼ばれている。このような道徳的能力と、知的、情緒的、社会的能力を含んだ総体が人格である。モラ

ロジ―でいう品性を完成した人間とは、最高道徳の諸原理の実行ができている人であり、知徳一体、情理円満な人間である。

モラロジ―における品性完成は、諸聖人の実行を手本として行うものであり、我々の心に巣くう自分中心の心づかいを改め、神の心である慈悲心にかぎりなく近づいていくことである。これは、更生(conversion)への道である。

広池の日記には、「無我の愛というは、己れをすつることなり。己れをすつるとは、己れの生命、財産、自由をすてて、人類の幸福に資することなり」、「なき生命を助けていただく上は、今後の生命は自分のものにあらざるがゆえに、一切これを人を助くる道具に使うこと」、「ただ明るき心と、我が心の修め方だけに心を使い、世界の心の師となります」などと記されているように、広池自身心づかいの修練を二十年以上も続け、世界の心の師となることを目指したのである。そして心づかいは無限であり、使う心が増えるとしている。

③ 累代教育

しかし、「人心これ危うく、道心これかすかなり」といわれるように、我々の利己心の根は深いため、我々一代の努力では利己心を完全に払拭することは困難な面がある。

そこでモラロジ―では、その道徳的努力を親から子へ、子から孫へと順次継続していかなければならないという。これを累代教育と呼び、その重要性を強調している。そのことによって「積善の家」を造ること、「万世一系の家系を造ることを理想としている。このことを広池は次のように述べている。

「然りしこうして、その興隆も一代にては容易に出来ぬのであります。たとえば、財産だけ一つ造るのにも一代にては容易でないのであります。この上に一家の健康を維持し、子孫の教育を完くし、社会の好地位を得、且

つ子孫永久の繁栄を得るといふことは実に極めて難いことであるので、これを一代に具備するに至る人は真に千萬人中に一人有るか無きかであります。(中略)しかるに今日の人々この原理を知らずして、急に成功せんとし、あるいは一事に成功すれば更に他に向かつて成功を急ぎ、事業に継ぐに事業をもつてし、多忙に継ぐに多忙をもつてして、道徳的修養の暇を失い、これがために年若きときには修養をもなし、道徳的実行のあつた人でも、多くは晩年に至つて過大の欲望に駆られ、ついに半代・一代もしくは二、三代にて滅亡してしまうのであります。また累代の貴族その他の名望家の子孫も、かかる原理を知らざるが故に、晏然として真の信仰もしくは道徳に耳を傾くるものなく、ついに祖先の偉業を滅ぼしてしまうのであります。この故に識者深くこの原理を味おうて、現代における真の積善、すなわち人心の開発及び救済の真慈悲心を興して、おもむろに子孫万世不朽の計画を建つるよう願ひあげます。』(『道徳科学の論文』⑨一三三―一四頁)

このように、モラロジーでは、代を重ねて徳を継承し、徳を累積していく累代教育を理想としている。

(3) 社会改善の学——世界平和実現の専門学

① 社会と道徳

モラロジーでは、人間は社会的動物であり、宇宙の中に生きる存在であることに鑑み、個人と社会、個人と自然の相即不離の關係にあるという事実を基盤にしている。個人の幸福実現と社会の幸福実現とは分けて考えることができないほど、互いに密接な關係にある。

すべての学問は多少とも人類の生存、発達、安心、平和、幸福の実現を目差している。広池によれば、学問の本質は、人類の発達及び幸福の根本原理に適合することであり、人類の発達及び幸福の根本原理は、聖人の教えに基づくところの最高品性をもった個人の多数をその成員とするところの国家を樹立することにある。それ故に正しい学問は、第一に個人の品性を完成することに尽力し、第二にその品性は自我没却の精神をもつて、国家の秩序・統一・国民全部の幸福の実現及び世界平和の実現を図ろうとする人間の慈悲の精神を完成することにある。したがって、正しい学問は、人間のある知識・思想・道徳あるいは信仰の一つあるいは数個を開発するものではなく、各個人に対して人類の発達及び幸福の根本原理を体得、実行させることにある。そこで個人の品性完成だけに重点を置き、あるいは国家の保存だけに重点を置き、あるいは単に世界の平和だけを主張して空虚な議論や運動を行うことはすべて不完全であるという。

要するに、正しい学問においては、個人としての品性の完成は、同時に国家の保存・統一及び完成ならびに國際關係の改善や世界平和の実現に向かつて尽力することを意味するのである。自己の品性完成と国家、人類世界の統制完成とは同一の原理によるのであり、同時に成就されるのである。

個人ならびに社会全体の幸福を実現するためには、社会の道徳的水準を高めていく必要がある。なぜなら、人間の社会を構成している要素は本能、知識、道徳であるが、中心的要素は道徳だからである。そしてこれは社会を構成する個人の品性完成へのあくなき努力によって徐々に実現されていくのである。

今日の多くの社会問題は道徳と關係しているばかりでなく、その解決の根本も道徳によらなければならないとする学者もいる。例えば、J・F・ラワリーズは、現代の諸問題は、その根底においては道徳の問題であり、これらの問題の解決のためには、まず最初に、正しい道徳的選択を行う必要があると述べている。(『科学・道徳・モラロジー』七〇頁)又、A・J・バームは、現代の世界の危機的状況とその解決のための数多くの世界モデルについて研究し、論評している。バームの見解の論点は次の点にある。(ア)すべての危機的問題は倫理的問題で

ある。(イ) 科学としての倫理学を利用することによって、危機は最もよく理解できる。(ウ) これまでの世界モデルは、危機の道徳的原因について触れているものが極めて少なく、特に科学的方法で道徳基盤を確立する必要を主張しているものは全く存在しない。

又、バームは、「道徳的退廃の増大、道徳不在の拡大は、他の重要な問題と結びついて、我々が思考及び態度を変えなければ、人類の終末をもたらす危険が迫っている。科学としての倫理学からの信頼できる結果を無視し、それを使用しないことよって、我々の問題はますます蓄積され、この問題を効果的に処理することがますますできなくなっている」(注 The Philosopher's World Model, 1979) と述べている。

② 社会の改善

社会の改善は、制度や形式だけの改善では不十分であり、それとともに人間の精神の改善をしなければならぬ。広池によれば、現代の識者は誤った学問や因襲的道徳にとらわれており、ただ政策的に事物の変化を行えば改善ができると考えて、研究とか調査とか会議とか審議会とか改造とか、いろいろなことを行っているが、一つも真に人類の安心、平和及び幸福を実現することができない。事物の変化では何事もできないのであって、正しい学問を国民に教育して最高道徳を普及する以外に、現代の人類に安心、平和及び幸福を与えることはできないのである。広池は、次のように述べている。

「今日道徳的に退廃せる世界の人心は他人の健康・生命もしくは幸福を思わざるのみならず、物質欲のためには自己の健康・生命及び子孫の幸福をも顧みず、その利益の獲得に向かって突進してとどまることを知らぬ有様であります。しこうしてかかる行動をもって国のためになるとか、会社のためになるとか、部下のためになるとか思っておるのですが、それはみな自分の眼が利己主義のために眩んでおって、大小・本末・軽重の区別を

見失うておる謬見であるのです。結局、公平に静かにこれを考えれば、みな自分の利己心からかくのごとくに猛烈な活動をなしておるにすぎぬことが明らかになるでしょう。」(『道徳科学の論文』⑧ 一一三―一一四頁)

又、人間の精神改善の重要性については、「思想(考え方)の変化ということがほとんど絶対的に偉大なもので、人間万事のことは、政治でも教育でも宗教でも実業でも、いかなることでも思想の変化から変わっていく、」信仰といい、道徳といい、事業というも、その成否、大小ともに、その根本は人間の精神に存する。」と述べている。

もちろん、精神の改善だけですべてが成就するものではない。正しい精神に基づいて、あらゆる知識、技術を駆使し、有効な改善策を立て、実践していくことが必要なのである。広池が精神を強調したのは、精神の重要性に気づいている人が少ないからであり、多くの人が普通道徳を基準にして、又、自分自身がよりよい道徳を身につけることに目を向けることなく、政策を考えているからである。

人間の精神改善の中心となるのは、学問、教育である。そこで、広池は正しい学問の原理を人類に提唱している。モラロジーという正しい学問は、神(本体)の心を継承した世界諸聖人の教説・教訓及び実行上に一貫する最高原理であり、これが人類の生存・発達・安心及び幸福の原理である。正しい学問・思想あるいは信仰は、一見してその範囲狭隘であるようにみえても、もともと宇宙自然の法則の正しい表現であるから、一切の真理を包含している。したがって、実際はその内容はなほだ広範であり、偉大である。それ故、正しい学問が真に国家や社会を益する価値をもっている。真に社会の最高識者に是認されるものは、すべて正しい学問・思想・道徳・信仰でないものはない。

この観点から、広池は、経済学、政治学、法学、倫理学、教育学などの欠陥を指摘し、学問の本来の姿を示

している。すなわち、広池は学問の改革を強く要請している。

例えば、経済学や経済組織は人間の自己保存の本能と道徳的本能と社会構成の原理の三つのうえに築かれなければならない。つまり聖人の教説と自然科学の原理に基づくものでなければならぬのである。

また政治学及び政治組織の原理は聖人の教えでは道徳を標準とし、その基礎に立つべきであると教えられている。しかしながら今日の政治学は一つの社会科学と称して、社会学、倫理学、法律学、経済学、歴史学の知識を採り入れる傾向はあるが、実際の研究法はやはり非科学的であって、文献上その他実験上の事実の全体の上に立つてその原理を求めることをしていないのである。

さらに、広池によれば、正しい学問と正しくない学問の区別は、学者のその学問研究の動機、目的及び方法が自然の法則に合致しているかどうかにあるから、主としてその学者の精神作用によって分かれるとされる。つまり正しい学者とは全く利己主義を離れ、最も進歩した学問の研究法によって真理を探究し、人類の生存、発達、安心、平和、幸福を増進するために尽力する人である。

科学史の研究者サートンが次のように述べる時、そこには広池の科学者に対する要請と共通するものがあるといえる。「科学者の本来なすべきことは、真理を探索することであり、そして、その真理が発見された上は、真理と彼自身を出来るだけ立派に純化することであり、そして常に愛をもつことであるように思える、この科学的客観性が十分に高められるときには、それは、最も無欲な人間の非功利性よりもはるかに根本的な一種特別の非功利性に達する。それはもはや欲望の問題ではなく、むしろ自我の忘却であり、自我の否定である」(『科学史と新ヒューマニズム』)

そこで、モラロジーの原理に基づいて、現代の政治学、法律学、経済学などの学問を改善することは極めて必要かつ急務だろう。特に現代の経済学や経済組織は不正な資本家や企業家の利益を擁護して、正しい事業家や一般人に迷惑を及ぼすような傾向がある。したがって、至急に正しい経済学を樹立して、正しい資本家や事業家の事業を進展させ、すべての国民及び人類の真の幸福増進を図らなければならないのである。

このような諸学問改革の要請をもつモラロジーを、広池は万有科学の基礎学として位置づけている。

ちなみにギユストルフは、「学際的集約への関心のみが、さまざまな人間の科学を真に人文科学とすることを可能にする」(『人間の科学と人文科学』、法律文化社、三八頁)と述べ、このような立場から基礎的人間学の確立を提唱している。

社会改善に順序があるとすれば、まず精神を造り、次に形式を造ることである。どんなに立派な形式をもっていても、その精神が正しくなければ意味をもたないだろう。又、精神の改革はまず個人からはじめ、次に家庭、社会、世界、人類へと順序で、次第に広い社会に及ぼしていくべきものとしている。これは、孔子の「修身齐家治国平天下」の考えと同一である。

次に、広池は、人間生活の基礎であり、社会を動かしている原動力として、経済を重視している。人間の精神生活を支えているものは道徳であり、物質生活を支えているものは経済である。この二つのものは本来一体のものであるという。つまり、広池は道徳と経済の一体であることを強調して、次のように述べている。

「われわれ人間生活は天地自然の一部分であって、精神生活と物質生活とに分かつことが出来るのであります。しこうして、精神生活の原理は道徳であり、物質生活の原理は経済であります。しかしながら、精神生活の原理たる道徳と物質生活の原理たる経済とは、これを本質的に考察するときには、ともに天地自然の法則すなわち最高道徳に基づくべきものであって、究極においては一体両面のものであります。されば精神生活の原理たる道徳

に違背することはいうまでもなく不道德に当たるのでありますが、これと同様に、物質生活の原理たる経済の法則を破り、もって商・工業等において失敗することもまた不道德に当たるのであります。」(『道徳科学の論文』⑧ 六一頁)

広池は、「経済学を物質の学となし、物質の生産、分配の法則を説明する学と誤解して、人間の実生活の法則を教うる一の学であることを悟っておらぬのである。したがって、社会とか国家とか会社とか銀行とか商店とかを物質の争奪所と考え、人間の実生活の活動場で、人間の安心・平和・幸福の出産地であることを知らぬのである。」(『広池千九郎語録』)とも述べている。

又、社会改善において、重要な役割を果たしているものは、政治、教育であり、そこにおいては、政治家、教育者の人格を重視している。

③ 平和について

個人及び社会の幸福は人類全体の幸福と深く関係している。人類の目的は、個人としては各人の幸福を全うすること、団体としては団体の文化を全うすることにある。しかしその幸福は、人と時代と場所とによって同じではないが、その実質は常に道徳に合し、人類の目的を達するに適する心づかいと行為を幸福とみなすことに、識者の見解が一致している。広池によれば、幸福と文明文化とは常に必ず相伴うものであって、その実質は道徳にほかならず、幸福文化を助ける心づかいと行いを道徳といい、又真善美といい、その発展を阻害するものを不道德といい、又偽悪醜という。そしてその道徳は人類の個人における精神的平和より、社会における団体の平和を意味するものであって、平和が存在しなければ人類の幸福文化は望めないから、道徳はすなわち平和であるといふことができる。この平和は人類の慈悲心の発達によって得られるものであり、結局人類の幸福文化は道徳す

なわち平和慈悲によって始めて得られるものであるという。

平和は、個人個人の日々の道徳活動を基盤にして徐々に成立していくものである。この基盤の上に、経済活動を行い、労使問題を平和的に解決し、政治上、宗教上の問題解決に努力していくことである。こうして、モラロジーは平和実現の専門学といふことができるのである。

(4) 人類進化の学

モラロジーは人類が進化してきたことを認め、モラロジーの究極の目的は人類の進化を促進することにある。人類はこれまで動物から人間へ進化し、人間自身においても、未開社会から文明社会へと進化してきている。しかも、人間の道徳性自体も歴史的に進化してきたとしている。すなわち、道徳は基本的に自己保存の本能を基盤にしているが、人類の進歩とともに、相互扶助、犠牲、連帯などの観念を発達させてきたのである。しかも、今後は普通道徳から最高道徳へと進化する時期にきているという。

人類進化の原動力は、精神の進化であり、道徳の進化である。これまでの道徳には、自分中心の利己心が混在していたが、今後の人類の進化は神の慈悲心を体得した人々を増やすこと、つまり最高道徳的人間の増大による進化でなければならないのである。

(5) 実践を重視した学問

最後にモラロジーは実践を重視した学問である。学問は人類の経験の結果を最も能率的に集約したもの、すなわち事実・真理もしくは実際というものの中から生じたものである。まず学問は本来事実に基づいたものである。

学問は人間の實際生活から得た経験を集約した結果であるから、實際を離れ、又常識を逸して人間の實生活と矛盾するところの研究、原理、意見などを指して学問と称することはできない。

道徳は実践されてはじめて意義をあらわす。もちろん理論を樹立することも極めて重大な課題であるが、それが実践されてこそ真価を発揮するものである。モラロジーは一つの科学であるから、知的にその原理を研究し、理解すれば、その目的は達成されるともいえる。しかし最高道徳は人間の品性完成の本質的手段として存在するものであるから、単に理解にとどまらず、必ずそれを実行しなければならぬ。広池は次のように述べている。

「モラロジーのごとき人間の品性完成の科学でも単に純理上から見れば、やはりこれは研究と理解とのみにあって、その目的はある意味において達せらるるものとして差し支えありません。しかしながら、最高道徳に至ってはこれを実行せねば、自己の品性を完成し、幸福を享受し、且つモラロジーの究極の目的を達成することは出来ぬのでありますから、その実行はただに最高道徳の生命であるのみならず、更に研究と理解とを主とするところのモラロジーの生命であるともい得るのです。」(『道徳科学の論文』⑦二三一—四頁)

要するに、モラロジーは単にある道徳上の知識として人類に提示されたものではなく、その原理を理解させた上でそれを實際生活に適用させようとする特殊の目的を有する新科学である。さらに広池は、「私の最高道徳の實行の事跡というものを知らねば真の最高道徳とか、あるいは真の道徳科学というものは解らぬのであります。すなわちこの道徳科学という教えは言論の教えではなく實行の教えでありますから、やはりこれを実行した私の精神と行爲すなわち私の道徳的事跡そのものが道徳科学の生命であるのです。」(『皇室奉仕の事蹟』四頁)と述べている。

モラロジーは単に実践を重視しているだけではない。実践における知識もあわせて重視している点に大きな特色がある。どんなに慈悲心をもっていてもそれを現実に有効に生かすためには、知識が必要である。ソクラテスは、徳は知であると述べている。釈迦が知(仏の知識)を尊重したことは、実践徳目(六波羅蜜)の最後に般若をおいていることから分かる。イエスにおいても、世間一般の知識は十分にもっていなかったかも知れないが、神の知は十分もっていたという。このように、モラロジーでは知徳一体であることを重視している。

(6) 学としてのモラロジーの問題点

上記のような壮大な規模と特色をもったモラロジーであるが、そこにはいくつかの問題点もある。この点について簡単に触れておこう。

(ア)学としての科学方法論が十分に示されていない。自然科学的な方法論についての記述も十分であるとはいえないが、特に社会科学的研究方法論や聖人の思想、道徳の研究法についてはほとんど説明されていない。

この点は今後の課題である。

(イ)道徳的理想についての道徳哲学的あるいは倫理的考察が欠けている。モラロジーは道徳事実の科学的研究を中心課題としているが、研究対象である道徳の内容、善悪、正・不正、義務、当為、良心、幸福などの意味について、理論的考察を深めることは、モラロジーの学的発展にとって不可欠のものである。

(ウ)文献学的考察が中心であり、実証的研究が不十分である。

(エ)『道徳科学の論文』に展開されている内容の一部には、今日すでに学問的にその真実性に疑問があるものがある。例えば、骨相学、人種改良学など。又、諸科学は急速に進歩、発展しているから、常に最新の研究成果を取り入れていく必要がある。

(d) 道徳的因果律の研究。モラロジーの中核となっているものは、道徳的精神作用とその結果との間の因果関係の究明にあるから、この点は今後とも理論的にも、実証的にも研究を深め、成果を累積していく必要がある。(e) モラロジーに基づく個別科学の確立。モラロジー経済学、モラロジー政治学、モラロジー法律学、モラロジー教育学など、モラロジーに基づく個別科学を確立していく必要がある。なお、広池は、「モラロジー経済学原論」を残している。

(x) 社会改善、世界平和実現のための具体的方法の研究。社会改善、世界平和実現のための基本理念は十分に示されているが、それを具体化する方法については体系的に示されていないので、研究の必要がある。

四、最近五十年間の道徳の科学的研究について

以上のような大きな特色と課題をもつモラロジーの学的発展は、モラロジーそのものの存在が日本においても世界においても認識されていない現状では見るべきものがないというのが実状である。しかし、前記四つの課題の個々の研究については、広池千九郎没後五十年においては注目すべきものが多く見出し出される。ここでは極めて不十分ではあるが、モラロジーにとって重要であると考えられるいくつかの研究傾向を概観しておこう。

① モラル・サイエンスに相当するもの

狭い意味での道徳の科学的研究にあたる著作は比較的多く出版されている。A・J・バームはその著『当為の科学』の巻末にモラル・サイエンスについて述べている学者として約六十名の学者をあげている。しかし、これも網羅されているわけではない。その他にも数多くの著作があるだろう。以下はその一部の例である。

キャラハン編『倫理の根底』、エステリッチ『道徳科学序論』、リリー『倫理学序論』、D・リヨン『倫理学と法

の原則』、アンギヤル『パーソナリティの科学のための基礎づけ』、アサジオリ『心理統合』など。

② 人間学の研究

ドイツの学者を中心にして人間学、哲学的人間学、教育人間学などさまざまな人間学が出現している。これらは、人間存在の生物学的側面、社会的側面、精神的側面の全体を科学的に研究しているものが多く、モラロジーの研究に大いに関係しているといえよう。M・シェーラー、ゲーレン、プレスナー、ロート、ホルノー、ウエスキュル、森昭（『教育人間学』）などがいる。

知情意を備えた全体としての人間を科学的に研究する学派として、人間性心理学は注目すべきである。アメリカの人間性心理学協会の条文によれば、「人間性心理学とは、特別の学派あるいは領域の研究というよりも、心理学全体の研究を志向するものである。これは個人の人格の価値を尊重し、研究方法の相違を尊重し、受容可能な手段に対しては常に開かれており、人間行動の新しい側面の探求に関心をもつ。これは現代心理学における「第三の力」として、現存の理論や制度にはほとんど問題とされていない、次のような問題を考察の対象とする。愛、創造性、自我、成長、有機的組織、基本的欲求の充足、自己実現、高次の価値、存在、生成、自発性、遊び、ユーマー、慈愛、自然なこと、暖かさ、自我の超越、客観性、自立性、責任、意味、フェアプレイ、超越的経験、至高経験、勇気、その他の関連概念」と述べている。人間性心理学は、現象学的であり、経験主義的である。又、これは人間の本質的な全体性と統合性を主張している。

又、日本では、ヒューマン・サイエンスやライフ・サイエンスの名のもとに自然科学から人文科学までの諸科学の総合の試みがなされており、注目される。また、いくつかの大学では人間科学部が設置されているし、水島恵一の「人間科学」の提示もある。

③ 道徳性発達の科学的研究

ピアジェに始まる道徳性の発達の科学的研究は、コールバーグ、レストなどに受け継がれ、大きく発展している。このほかにも、ライト、W・ケイ（『道徳教育』）などがある。又、心理学の方面において、道徳性を中心とした人間性の発達の科学的研究として注目すべきは、シャロツテ・ビューラー、エリクソン、ハヴィガーストなどである。

④ 心身医学および精神作用の科学的研究

キヤノン、セリエから出発した欧米の心身医学の研究はすでに五十年以上の歴史をもっており、ぼうだいな文献がある。日本でも約三十年の歴史があり、これらの業績の研究はモラロジーにとっても不可欠のものである。フランスのバリユック、ショシャルなどの研究は道徳的精神作用を重視している点で、特に注目したい。最近では、医学は患者の人間性をもっと考慮すべきであるという主張が強くなり、全体的な医学の研究が進みつつある。

精神作用の力の研究はウイリアム・ジェイムズの研究以来多方面からなされており、最近ではこの研究が急速に進みつつあるといえる。この分野は極めて大きな広がりを見せているが、ここでは無意識の研究、潜在能力の研究、ESPの研究などを上げておこう。

これは脳の研究の進歩と深く関係しているが、脳の研究の進歩につれて今後飛躍的な発展が予想される。最近の脳の研究者としては、プリブラム、スベリー、ロイ、エックルズなどがある。

⑤ 利他心と利他的行動の研究

この分野の研究も盛んになりつつある。これはいわゆる普通道徳の研究が中心になっている状況であるが、モラロジーにとっても大いに参考になる研究成果が出ており、今後の発展が期待される分野である。

⑥ 聖人の思想・道徳の科学的研究

すでにベルグソン、ヤスパース、W・ジェイムズ、マスロー、ソローキンなどの研究があり、これらの学者の研究は綿密に研究する必要がある。さらに最近のニュー・サイエンスの研究者の中からこの研究をする学者が増えてくるものと予想される。

⑦ 科学方法論の研究

新しい科学方法論がしきりに出されている。その傾向は、知情意の全体としての人間を研究するための方法についてのものが多い。この点で、ポラニー、人間性心理学者、現象学者、現代の物理学者、ニュー・サイエンスの学者などの科学方法論は参考になる。

又、コスモロジーやさまざまなシステム論なども、人間の価値的行動を含めて、宇宙の中の人間を総合的に研究する方法を提示している。

⑧ 人類の進化の研究

進化論が新たに見直されている。これは一つには、ダーウィンの進化論の系統にそって、人間進化の事実を論ずるものである。他方では、別の側面から人類の進化を主張する見解がある。例えば、最近の研究ではウィルソンの社会生物学の研究が注目される。又、ドーキンスは、文化を担う自己複製子（ミーム）が人類特有の進化を解くかぎであるとしている。又、ヤンツはその著『自己組織化する宇宙』で、「あらゆるものは複雑な関係性から、自己を超越し、進化を続けていく」と述べ、「環境を拡張することでの進化」と「意識を拡張することでの進化」などを主張している。さらにK・ウィルバーは人間の意識の進化について詳細に論じている。

⑨ 普遍的道德確立の要請

世界各国の交流がますます激しくなり、国際化時代を迎えた今日、普遍的道德確立の要請は高まっている。道德とは本来普遍的なものであるべきであるという見解もある。日本では、中村元教授を中心とする比較思想、比較文化の研究者がこの研究を行っている。また人間中心主義の倫理学、科学的ヒューマニズムなどの主張もある。さらに、人類ばかりでなく、生物全体とのかかわりにおいて人間のあり方を考える必要を訴えるエコロジカル倫理学確立の要請とその内容の展開もかなりみられるようになった。これは人類を越えて生物全体に妥当する普遍的道德基準確立の要請である。

⑩ 経済と道德を結びつけた研究

この分野の研究が進みつつある。道德と経済は一体のものであると主張するモラロジーにとって大いに関心がある点である。例えば、ポールディングの「道德科学としての経済学」、シュマッハー「人間復興の経済学」などがある。

⑪ ささまざまな職業倫理の研究

医師の倫理、政治家の倫理、科学者の倫理、教育者の倫理などさまざまな職業倫理が研究されているが、これらは、モラロジーに基づく個別科学を確立する上で参考になるだろう。

⑫ その他

上記の研究以外にも、モラロジーと関係のある研究成果が多く存在するものと考えられる。特に、心理学、社会学、人類学、生物学、生理学、医学あるいは学際的研究をめざす多くの研究などが考えられる。A・J・パームは前掲書の中で、モラル・サイエンスの分野以外の道德の科学的研究の著作として、次のものを上げている。

E・C・ヘイズ『社会学と倫理学』、E・A・ウェスタマーク『倫理的相対主義』、G・J・テイラクル『倫理学の社会学的研究』、E・A・シュプランガー『人間の類型——パーソナリティの心理学と倫理学』、A・F・リッグス『知的生活』、H・L・ホリングワース『心理学と倫理学——義務感の研究』、R・B・キャッテル『科学の立場からの新しい道德』、R・S・ピーターズ『心理学と倫理的発達』、J・M・ドーゼイ『倫理の心理学』、M・エーデルとA・エーデル『人類学と倫理学』、J・A・ホブソン『経済学と倫理学』、J・F・フルバッツァー『経済学史における倫理の概念』などである。

五、モラロジー研究所研究部の現状と課題

(1) 広池博士の研究部構想と残された三十四項目の研究課題

広池は『道德科学の論文』に最初の試みとしてのという形容句をつけているように、モラロジーを完成されたものとは考えていない。これは科学である以上当然のことである。すなわち、広池は次のように述べている。

「要するに、モラロジー最初の著書たる本書においては、単にモラロジーの精神を文章に具体化してこれをもつての精神科学に組織し、もつて世界の人類に対してその精神的及び物質的生活における確実なる標準を示すにとどまっておるのであります。この故にそのモラロジーの精神を更にいっそう世界の人類に普及させ、もつてその心を開発しかつ救済し、しこうしてモラロジー建設の目的を達成することは、今後における私のひっせいの努力と、将来における真理を愛好しかつ最高品性の完成を求むるところの後進学者の努力とに俟つ次第であります。さればこの意味よりして、モラロジーの研究という名に値する真の研究は、今後にあるものというても差し支えないのであります。」(『道德科学の論文』①序文一三三頁)

又、広池は最高道徳を世界に普及して人心を開発する根本方法は、モラロジーの研究を大成することにあるとし、『道徳科学の論文』はモラロジーの最初の著書にして、まだはなはだ不完全であるから、将来大いにこれを訂正増補しなければならないこと、時代の推移に伴って、道徳実行の方法もこれに適應させなければならないから、最高道徳の原理ならびにこれに関連する諸科学の原理の研究は、将来永久にわたって継続的に行う必要があること、モラロジーの研究の研究室のほか、世界各地に研究所を設立する必要があることを示している。

広池自身が考えていた研究部構想は以下のようなものであった。

- 1 生物学および人類学的研究部
- 2 経済学的研究部
- 3 心理学および生理学的研究部
- 4 史のおよび社会学的研究部

そして広池は、『道徳科学の論文』の中で、今後研究すべき課題として、具体的に次の三十四項目を挙げている。

- 1 生物及び人間の生命の連絡に関する研究
- 2 自然力の人間に及ぼす影響と一般生物に及ぼす影響との比較に関する研究
- 3 自然力と人間の道徳との関係の研究
- 4 社会感化力の研究
- 5 一代獲得形質の研究
- 6 精神遺伝の研究

7 社会遺伝の研究

8 ゴッダード博士の『カリカック家』の研究のときをはじめとして、このほかに広く世界的にこの類の材料を収集すること。

9 ポペノー、ジョンソン共著『応用人種改良学』に引照せられてあるところの米国ワシントン市の系統記録所の仕事のごとき結果と道徳との関係の研究

10 実験心理学における精神作用と肉体との関係についての徹底的研究

11 特に道徳・信仰及び肉体の相互関係の研究

12 道徳・信仰及び寿命の相互関係の研究

13 動物試験所を置きて特に動物の憤怒・喜悅・驚愕その他の精神作用のその疾病・健康及び寿命に及ぼす影響に関する研究

14 研究所の財力に余裕を生じる場合には、植物試験所を置きて、進化論及び遺伝学の研究をもなすこと

15 精神作用と伝染病との関係につきての研究

16 人類学的及び文明的に道徳及び信仰の価値を徹底的に研究すること

17 犯罪者と道徳教育との徹底的研究

18 骨相学と道徳との関係に関する徹底的研究

19 親孝行より生ずるあらゆる結果に関する研究

20 博愛科学の研究

21 セツルメント・ワークの研究

- 22 法律学の原理（正義）と諸聖人の精神（慈悲）との調和及びその応用に関する具体的方法の研究
- 23 労働問題の道徳的解決に関する研究
- 24 政治学及び法律学の原理に関する徹底的研究及び政党の道徳化に関する具体的方法の研究
- 25 世界永遠の平和の実現に関する具体的方法の徹底的研究
- 26 中流以上の学問もしくは才知ある人の子孫に比較的多くの心身障害者ある理由の研究
- 27 人種改良学・環境改良学及びモラロジーの原理を調和して人間を変化せしむる具体的方法の徹底的研究
- 28 日・時・方角・吉凶及び干支の関係、特に丙午婦人に関する伝説の実否いかん、及び以上の事実と道徳との関係についての研究
- 29 スマートの『一経済学者の反省』に関するごとき道徳的経済学の完成に関する研究ならびにモラロジーに立脚する新経済学の建設に関する研究
- 30 人口問題・食糧問題・移民問題及び道徳の相互関係における研究
- 31 世界各国において今日存続せる旧家と道徳との関係、すなわち万世一系の家、積善の家及び積不善の家の運命に対する調査。ただしこの調査は日本・朝鮮・中国・インドその他のアジア諸国より欧州各国・両米各国にわたりて精密の調査をなすこと
- 32 興隆期の家と衰退期の家との状態の調査
- 33 世界諸聖人の事跡に関する研究
- 34 最高道徳によるところの人心の開発もしくは救済実行の結果に関する帰納的調査

(2) 研究部の歴史と現在

広池が昭和十年に道徳科学研究所を設立した時には、モラロジー研究といえるものは開始されていなかった。研究所のスタッフの大部分は、学校教育と社会教育にたずさわっていたため、学問的研究を行う余裕がなかったといつてよいだろう。

本格的な研究を目的とする研究部が確立されたのは、昭和三十一年、現モラロジー研究所所長広池千太郎が研究部の責任者になってからである。その時の研究員は数名であった。その後、大沢俊夫研究部長の時代に研究員は増加し、現在では二十五名になっている。

研究部の研究課題は、前記の広池千太郎の残した三十四項目の研究を行うことにある。今日に至るまで多くの研究が積み重ねられてきたが、しかし、その多くは、モラロジーの内容をより正確に理解するための理論的研究と広池千太郎の遺稿の整理、編集を中心としたものであったといえる。しかし、十分なものとはいえないが、実証的研究もあった。これまでの研究を大別すると、

(ア) モラロジーでもちいられている学術語についての研究

(イ) 最高道徳の諸原理の研究ならびにモラロジーの理論構造の研究

(ロ) 道徳の科学的研究の歴史の研究

(ハ) 日本の宗教の研究

(ニ) 世界及び日本の家系の研究

(ホ) 広池千太郎の事跡の研究

(ケ) 歴代天皇の研究

(ウ) 聖人の研究

(ク) モラロジー教育の研究

(ロ) 道徳と経済一体の研究

(ハ) 人権問題の研究

などがある。このほかに、重要な業績として、モラロジーに基づく社会教育のための教材作成（海外向けの翻訳テキストの作成を含めて）がある。

現在、研究部は①基礎理論研究室（スタッフ五名）、②教育研究室（スタッフ四名）、③経済研究室（スタッフ五名）、④広池博士研究室（スタッフ四名）、⑤比較文化研究室（スタッフ四名）の五つの研究室に分かれ、それぞれの研究室の研究課題は次のとおりである。

① 基礎理論研究室

モラロジーの基礎理論の研究ならびに道徳史、道徳思想史の研究を課題としている。又、宗教ならびに現代科学の研究も行っている。

② 教育研究室

モラロジー教育学確立のための基礎的研究ならびにモラロジーに基づく家庭教育、学校教育、社会教育などの研究を行っている。

③ 経済研究室

モラロジー経済学、経営学確立のための基礎的研究ならびに企業の実態調査を行っている。又、最高道徳の社会科学的研究を目ざしている。

④ 広池博士研究室

二十数万枚に及ぶ広池千九郎の遺稿を整理、保存し、「広池千九郎博士資料集」の編集を行っている。又、広池千九郎の伝記及び事跡の研究も重要な課題である。

⑤ 比較文化研究室

諸聖人の研究ならびに各国における精神的、思想的伝統の現代的展開の研究を行っている。

研究部では、月二回研究会を行うとともに、年一回モラロジー研究発表会を行っている。その間に、内外の講師を招き、研究会を開催している。研究業績は年数冊の『研究ノート』を内部資料として作成しているほか、年二回『モラロジー研究』を発行、すでに二十二号まで刊行している。

広池博士が『道徳科学の論文』を発行してから既に六十年経過した。しかし、その間に、上記のようなさまざまな研究が積み重ねられてきたが、学としてのモラロジーの発展という面からみると、今後の研究に残された課題は極めて大きいといわざるを得ない。

行うべき研究課題の大きさに比べて、研究成果はまだまだわずかなものである。その原因の一つには、モラロジーが壮大な体系をもった学問であるからであろう。広池ほどの学力をもたない我々には、総合的学問としてモラロジーの学的発展は困難な課題であることは確かである。もちろん、道徳の科学的研究を認めない学問界の傾向にも大きな問題がある。残念ながら、これまで依然としてモラロジーは学問界でその位置を与えられていない。特に、道徳を研究の対象としている倫理学、道徳哲学などにおいては、規範についての理論的研究が主流であり、道徳の科学的研究の可能性を積極的に肯定する立場は少数である。

又、現代の学問は細分化され、モラロジー研究所の研究員自身も細分化された学問を専門に研究してきたもの

であり、総合的な学問研究に慣れていないことも一原因であろう。もちろん個別的な研究自体もそれほど容易なことではない。そこで、これまでは個別的研究を積み重ねるといふことで、モラロジーの研究を進めてきたといふのが、現状である。

研究部長を十年間勤めた大沢俊夫麗沢大学客員教授は研究部の課題を次のように述べている。

「これからの研究の方向ですが、研究部はもとよりのこと、団体としても、まず現代日本あるいは今日の国際的な共通の社会問題がなんであるか、それを的確に認識し、問題の所在を明らかにしていくこと、そしてそれらの問題に対するそれぞれの学問分野での研究のもっとも進んだ成果をしっかりと学びとっていくこと、そしてその上に広池博士の学問的立場、内容というものをこれも徹底的に学びとって、モラロジーの立場に立ちながら現代の社会問題、思想問題に取り組み、問題解決の方向を示唆できるような、そういう研究を進めていきたいと、こういうふうにいるわけでございます」

今後は、我々は内外の学者の協力を得て、学としてのモラロジーの確立ならびにモラロジーの研究課題に取り組んでいかなければならない。多くの人々が精神の向上を求め始めた今日、正しい道德基準を確立するために、モラロジーに課せられた使命は大きいと考える。それは確固とした学問的基盤の上に樹立することと、日々に新たに実践することの双方を兼ね備えたものでなければならぬであろう。